

南予推進ブロック 研究報告

鬼北町立日吉小学校、日吉中学校

1 取組の内容

小・中学校が連携した、英語コミュニケーション能力を育成するための実践研究

(1) 指導体制や音声面に関する指導法の工夫

ア 乗り入れ指導（ＴＴによる指導）

- コミュニケーションの育成
- 中学校から小学校への事例
- 小学校から中学校への事例

イ 異学年交流

ウ 教材の整備

(2) 評価の工夫

ア 評価カードの活用

イ 展開の工夫

(3) 小・中連携カリキュラムの作成

2 成果と課題

中学校の外国語担当者と一緒に授業を行うことで、児童が知りたい英語の表現や発音などを、適宜指導することができるようになった。また、中学校の外国語担当者が児童と積極的に関わりをもつことで、児童が積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が養われた。ＴＴを継続することで、児童の様々な学習活動を複数の目で見ることができ、より細かい評価につなげることができた。児童にとっては、学級担任以外の教師と接する機会が増え、積極的にコミュニケーションをとるようになり、小学校を卒業して中学校へ入学する際の接続がスムーズになることが期待できる。また、外国語を学ぶだけではなく、外国の話を聞く機会が増え、国際理解教育の面からも効果的である。

中学校の外国語担当者が小学校の外国語活動に参加することで、小学校での外国語教育や児童の様子を把握することができた。また、小学校の外国語活動担当者との連携を密にすることで、児童の実態に応じた指導計画を練ることができ、より効果的な支援をすることができた。

また、中学生が小学生との交流授業に向けて英語劇を練習している際、生徒を観察していると、普段より相手を意識して英語を話したり聞いたりする態度が顕著に感じられた。生徒は「小学生の手本になるように頑張って練習しよう。」「小学生にとって分かりやすく発音しよう。」「ジェスチャーを取り入れて、劇の内容が分かるようにしよう。」など、英語で伝えようと努力する態度が見られた。英語の学習が単なる言語の習得ではなく、コミュニケーションを豊かにするための場として捉えられていることが、生徒との会話や日記から感じられた。

3 成果のあった取組事例

○ 乗り入れ指導（ＴＴによる指導）

２学期から、中学校外国語担当者が小学校を訪れ、５・６年生の外国語活動に参加することにした。それに伴い、授業日前日の打合せと授業日放課後の反省会も行うことにした。

小学校の外国語活動担当者が授業で最も苦手とするのは発音である。ＣＤ等の音声教材に頼らなくても、中学校外国語担当者の生の発音を聞かせることで、より効率的に外国語の音声に慣れ親しませることが可能になった。

・ コミュニケーションのモデルとしてのＴＴ

小学校の外国語活動担当者（Ｔ１）と中学校の外国語担当者（Ｔ２）の英語のやり取りを見たり聞いたりすることで、児童が繰り返し、英語によるコミュニケーションに触れることができるようになった。児童にとって、「あんなふうに言ったり、したりすればいいのか」というコミュニケーションモデルが成り立ち、コミュニケーション能力の育成に効果があった。

・ 小学校での授業

中学校外国語担当者が小学校を訪れ、外国語活動の授業に参加する回数を重ねるごとに、Ｔ１とＴ２のコンビネーションも良くなり、スムーズに授業を進めていくことができるようになった。アンケート結果からは、外国語活動を楽しく感じる児童が増え、英語の意味を聞き取れる児童が増えたことが分かった。

また、英語で自分のことを伝えることができそうと感じている児童も増えた。このことにより、中学校外国語担当者が小学校を訪れ、外国語活動の授業を行ったことは大いに成果があったと考えている。

・ 中学校での授業

中学１年生の英語の授業において、小学校外国語活動担当者によるＴＴを実施した。生徒にとって、昨年度の担任の先生の訪問とあって、より意欲的に活動に取り組んだ。活動の内容を工夫し、ゲームを取り入れたコミュニケーション活動を行うことで、生徒たちは楽しい雰囲気の中で、積極的に活動した。授業後には、生徒から「中学生になった自分をみてもらえてうれしかった」という感想が聞かれた。